

お彼岸（彼岸会）

毎年春分・秋分の日を中心に勤修される法要。日本で始まった仏教行事といわれる。「彼岸」とは生死を超えたさとりの世界である浄土のことで、浄土真宗では浄土に思いを寄せ、仏徳讃嘆・仏恩報謝の思いを新たに
する法要とされる。

朝戸 臣統

闇を照らすともしび

..... 1

負野 和夫

人とのご縁を大切に生きる

..... 11

藤井 智子

葬儀は別れの場ではなく、出遇いの場

..... 21

北塔 光昇

浄土真宗と春彼岸

..... 31

表紙絵・挿絵／森長 あやみ

闇を照らすともしび

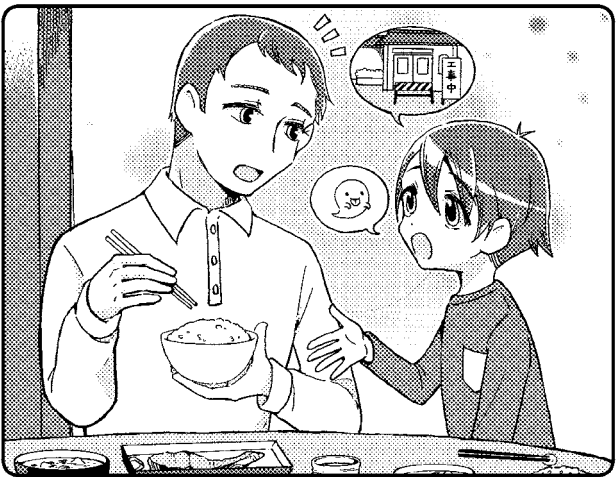
朝戸 臣統

●月明かり

今から十八年前のことです。夕食のひとときでした。

「ねえ、お父さん。今日の夜八時に友達遊びに来るけど、いい？」

当時小学五年生だった長男が、私にそう尋ねました。その頃は、お寺の庫裏くら（住職やその家族の居住部分）を建て直すため、古い建物を解体している最中でした。その日の午前中は、土壁と木組みと床板が残った



建物の中を二人で探検していたので、友達にその様子を話したのでしょうか。「へえ、そんな遅い時間に友達が遊びにくるの?」

と尋ねると、満面の笑みでこう言いました。

「うん、友達がな、オバケ屋敷の探検をしたいんやって!」

おお、そう来るか! 予想もしない返事でした。もうちょっと早くわかっていたら、私もオバケの格好をして参

加できたのですが。それは諦めて、外で子どもたちの様子を見守ることにしました。

一本しかない懐中電灯を持った長男が、三人の友達を引き連れて、解体中の建物の中に入っていきます。

「もっとゆっくり歩けよ。足もとが見えんって……!」

子どもたちが大層怖がっている様子が伝わってきます。

「お、階段があるぞ。上ってみようぜ!」

どうやら二階に上ろうとしているようです。一階でも怖がっていたので、二階はもっと怖がるだろうと期待していたのですが、その思惑は見事に外れました。子どもたちは、あっけらかんとして、□々にこう言ったのです。

「おお、明るいー」

すぐにその理由がわかりました。解体が進み、すでに屋根のトタンがめくられていたため、二階へ上がると、月明かりが足もとを照らしてくれていたのです。私は理由がわかると同時に、子どもたちの言葉にハッと思いました。それは、私の常識、あたりまえとは「真逆」の言葉だったからです。

蛍光灯の明るさがあたりまえだと思っている私は、外へ出ても月の明るさに気づけず、「暗いなあ」としか思えません。しかし同じ状況でありながら、暗闇の中にいた子どもたちは、月明かりによって「明るいー」ということに気がつきました。子どもたちに教えてもらった大切な気づきでした。

ご法座で、この話をしたところ、連れ合いから褒められました。

「今日のお話、とってもいいよね」

めったに褒めてくれない妻からそう言われうれしい気持ちになり、続けて感想を聞きました。

「あなたの言う通り、子どもたちは暗闇の中にいたから、月明かりに気がつくことができたのよね。子どもたちの気づきって本当にスゴイよね。外は暗いからといって、ネオンサインの灯りにフラフラと惹き寄せられるあなたとは、ぜんぜん違うんじゃないの？」

あらら、褒められていると思ったら、痛いところを突かれてしまいました。でも、連れ合いの指摘は、とても大切なことを私に伝えてくれたように感じるので。